

## エルンスト・ルードヴィッヒ・ウーライが遺したもの —作曲と音楽教育活動からの考察—

What Ernst Ludwig URAY left  
—Consideration from his composition and musical education activity—

谷 中 優  
Suguru Taninaka

### 〈要旨〉

現代オーストリアの作曲家であり音楽教育者であったエルンスト・ルードヴィッヒ・ウーライは、「ヨーロッパの伝統音楽を守るために選ばれた人間」と自負したように、伝統的な作風に立脚した作品を多く遺した。同時に、国際交流を含むグローバルな音楽教育の重要性・必要性を認識し、生涯をとおしてその具現化のための努力を惜しかなかった人でもある。我が国とも交流があり、特に日本の若い音楽家たちにも少なからず影響を与えた。

ここでは彼の作品分析を含む作曲活動や音楽教育活動から、彼が遺したものを創作と教育の両面から考察する。

### 〈キーワード〉

オーストリアの作曲家、音楽教育、国際音楽祭、吹奏楽

## 1. エルンスト・ルードヴィッヒ・ウーライと音楽芸術

「私は伝統的な西洋音楽を受け継ぐために選ばれた人間である。」これは生前エルンスト・ルードヴィッヒ・ウーライが語った言葉である。確固たる使命感と自信がなければ到底そのような言葉は発せられないだろう。あえて語ったところに、彼の音楽に対する信念と情熱をうかがい知ることができるのである。そうしてその言葉どおり、彼は20世紀の後半にあっても、近・現代的な創作の手法に振り向くことなく、古典・ロマン派的な作風とスタイルを一貫して固守した、現代においては希有な作曲家であった。

ここでは彼の作品やその分析、あるいは音楽教育活動等から人物像に迫るとともに、その精神や遺したものを考察する。

## 2. ウーライを取り巻く環境

### 2-1. 故郷シュラートミンク

エルンスト・ルードヴィッヒ・ウーライについて語る時、その生い立ちとともに、生育環境、特に自然環境については欠かすことができない。何故なら、それらの豊かな自然環境が彼の人間性や作品に大きな影響を与えたことは確かなことであるのだから。そうして彼は終生、生まれ故郷であるシュラートミンクへの深い愛情を絶やすことはなかった。

ウーライの故郷であるシュラートミンク市 (Stadt

Schladming) は、アルプス山脈の最東端に位置し、その地は古くから栄えた歴史ある美しい町である。観光地としてもウィンター・スポーツ・エリアとしても知られ、毎年多くの観光客を迎えている。周囲はプラナイン山をはじめ2000～3000m級の山脈 (ダヒシュタイン-タウエルン地域) に囲まれ、その中央に位置する、海拔741mの山間の小さな町である。

1982年には当地でアルペンスキー国際選手権大会が行われ、その為シュラートミンクまでのアウトバーンが完備された。それに伴って、当時急速に言語や外食産業等を含めた異文化が浸透して現在に至っている。また自然環境の保護をはじめ、町の景観等行政的にも長いスパンでの多くの工夫や努力の跡がみられる。今もなお、訪れた多くの人々をして「ヨーロッパ屈指の美しい町」と言わしめている。

### 2-2. 生い立ち

エルンスト・ルードヴィッヒ・ウーライは、1906年4月26日、シュタイヤーマルク州のそのような小さな美しい町であるシュラートミンクに生まれた。既述のような自然環境、そして特別な環境—音楽愛好家の両親の元で、何不自由なく育った。その間楽器<sup>1</sup>に親しみ、室内楽や歌曲、オーケストラ作品に触れている。やがて父親の仕事の関係で州都グラーツに移住。グラーツにおいても周囲は変わることなく、音楽・自然環境ともに良い環境のなかで、彼の生活は継続された。後にウーライはグラーツについて、「私

の第二の故郷」と述べている。

間もなく州立音楽院、ウィーンのエム・アカデミーのジョセフ・マルクス（Joseph Marx）、のちにフランツ・シュミット（Franz Schmidt）のもとで音楽理論を学ぶ<sup>2</sup>。

一説<sup>3</sup>にはグラーツ時代、作曲家・指揮者であるグラーツ大学のモイジズヴッチ・ロデリッヒ・フォン・モイズヴァー（Roderich Mojsisovics von Mojsvár）に作曲を師事したともいわれるが、筆者手持ちのウーライ本人の記載によるものからはその名は出てこない。

（図1）<sup>4</sup> Ernst Ludwig URAY



### 2-3. 経歴

1933-38 ウィーン社会教育協会音楽アドバイザー  
1938-45 RAVAG の第一音楽部門メンバー、のち主要専門家（作曲家）  
1938-45 ウィーン州立芸術音楽院、のち連邦音楽大学の教師となる。  
1940-41, 1943-45 兵士として従軍。1945年3月重傷を負う。  
1946-71 グラーツ駅音楽部指導者。のち「スタジオ・シュタイヤーマルク」指導者。1971年から年金受給。

#### 【受賞歴】

1932 Coolidge-Kortschak 賞  
1939 ウィーン・コンツェルトハウス賞  
1944 ウィーン市シューベルト賞  
1952 シュタイヤーマルク州政府ジョセフ・マルクス賞  
1954 オーストリア州賞（歌曲作曲振興賞）  
1955 Professor 称号  
1966 シュラートミンク市名誉リング  
1973 オーストリア名誉十字（科学と芸術）  
1976 グラーツ市名誉金文字賞  
1977 シュタイヤーマルク州大名誉文字賞  
その他受賞多数。

特に1971年以降は、音楽教育・音楽文化の普及向上を指向して様々な音楽関係のボランティア活動を実践した。特

に青少年の教育には力を注いでいる。但し彼の永年の作曲活動には、青少年に向けた「教育的」な要素が多分に包含されていることは既述したことである。

例えば1977年からスタートした邦訳「シュラートミンク市夏の国際音楽祭」（Schladminger Musiksommer）はウーライが提唱し、毎年フェスティバルの音楽監督・オルガナイザーとして、その準備から最後まで多くの仕事を精力的にこなした。

（図2）



### 2-4. ウーライの人物像

ここでは、筆者がウーライに初めて会った1980年から亡くなるまでの間の交流や様々な情報（筆者の二度の国際音楽祭参加における当地での直接的な触れ合い、手紙等の受信、あるいはウーライ婦人や近い音楽家や作曲家等、周囲の人々の情報等）から、作曲家ウーライについて（筆者のフィルターを通した）人物像・人間性に迫りたい。

筆者がウーライに初めて会った '80年には、彼は既に長く心臓病を患っていた。音楽祭の折にもスイスでの療養途中でシュラートミンクに赴いている。期間中にも何度か発作を起こした。それは筆者の二度目のフェスティバル参加の折も同様であった。そのような状態であったにも関わらず、ウーライは自分以上に周り、特に我々参加者に気を配り、手厚い接待を惜しまなかった。セミナーでの若い人たちへの指導においても懇切丁寧に対処している。音楽を愛し、人を愛し、自然を愛した。真面目、勤勉、厳格。反面、言語についてはドイツ・オーストリア的頑固さを併せ持った人でもあった。例えば「他の外国語は」との筆者の問いに、「なぜオーストリア人が他国語を話さなければならないの」と即答したように。それらを全て包含した現代オーストリアの作曲家・音楽教育者—Ernst Ludwig Uray—がそこにいる。

## 3. 作品について

### 3-1 作品の概要

作品は60の歌曲、室内楽、ピアノ、オーケストラ作品、カンタータ、メロドラマ、合唱曲とオーケストラ、ミサ曲、放送劇用音楽の他、多くの民謡の編曲や楽譜出版、テレビ番組制作、レコード制作、映画音楽等多岐に亘る作品があり、1980年代現在、オーストリアの作曲家として最も多い楽譜出版数を誇っている。おそらく現在においてもその金

字塔は輝いているだろう。

それらには教育的色彩の濃い青少年のための作品も多く含まれる。作品の全てには音楽に対する真摯な姿勢、そして音楽への愛情や情熱、また自然や神への畏敬の念と信仰、さらに強い人間愛が溢れていることを我々は知ることができる。これらのことはウーライの人間性に由来している。

### 3-2. 「ファンファーレ」

まずスコア（総譜）を提示する。

(図3)

最初に“Schladminger Stadtfanfäre”について述べてみたい。上の総譜はウーライの直筆である。作曲年は記載されてなく、他の資料にも本件についての詳細は見当たらない。但し1980年の「シュラートミンク市夏の国際音楽祭」の期間中、筆者はまだインクの香り残る楽譜を本人から手渡されたことから、おそらくその年の作品であると思われる。

作品はEs dur（変ホ長調）、4分の3拍子。8小節<sup>5</sup>のブロック3個（24小節）により成っている。各ブロックは調の異なる全く同じ曲で構成される。つまり、第Iブロックの2度上の調であるへ長調が第IIブロックであり、その2度上の調であるト長調が第IIIブロックである。次にその調関係を表で示そう。（ ）内の数字は小節数である。

| I ブロック (8) | II ブロック (8) | III ブロック (8) |
|------------|-------------|--------------|
| Es-dur     | F-dur       | G-dur        |

これをみると、いかに単純明快で合理的な構成であるかということが良く理解できる。このことは創作においても西洋合理主義が脈々と波打っていることを示しているといっても過言ではないだろう。そうしてそれは古典・ロマン

派の音楽にも生きているものでもあり、西洋の伝統音楽の一つであるともいえる。

楽曲はEs dur から長2度高いF dur に転調し（第二ブロック）、さらに長2度高いG dur に転調している（第三ブロック）。一般的に転調の多くは近親調に転調するか、もしくは特に旋律的な楽曲は短二度（半音）上または下の調に転調している場合が多い。但し長二度の転調を進行させることで、本ファンファーレはより明確にファンファーレとしての性格を打ち出している。

楽曲のラーメン構造を確認した後は、和声進行について分析してみよう。その構造も非常に単純であり明快である。基本的には機能และ声 T, S, D<sup>6</sup>を基に進行している。次に和音構造と進行を表で示す。（I=T, IV=S, V=D）

| 小節  | 1              | 2       | 3      | 4       |
|-----|----------------|---------|--------|---------|
| 和音  | V7             | I V11 I | V11 I  | V V IV9 |
| 省略音 | 第3音            | 7<br>9  | 3<br>9 | 7       |
| 備考  | 7オフトクト<br>(1拍) |         |        | T       |

| 小節  | 5         | 6       | 7           | 8  |
|-----|-----------|---------|-------------|----|
| 和音  | V7 IV9 V7 | I V11 I | V7, IV9, V7 | I  |
| 省略音 | 5, 7      | 7<br>9  | 7           |    |
| 備考  | T         |         | T           | 2拍 |

前出の表から、3小節目二分音符のDコードに第3音、つまり導音が省略されていることがわかる。また1小節目（アウフトクト）の第7音が2小節目1拍目のTコードで2度下行して解決しているが、7小節目3拍目の第7音は2度上行して主音に進んでいる。またI (T) 以外の多くは、9度11度のテンション・コードを多く使用している。こういった和音構造や進行をみると、クラシック伝統音楽を継承する人間と自負しそれを基本としながらも、作曲家としての創意工夫とともに、彼なりの新しいものへの挑戦を感じることができる。

また楽曲のバス・パートについて別のアナリーゼ（分析）として、例えば2, 4小節のEs音, 4, 5小節のB音を極短のオルゲルプункト（通奏低音）と考えることもできよう。その場合、和音構造はより単純になる。

楽曲編成は、Trumpet I, II, Posane<sup>7</sup> I, IIの4パートである。スコアの下には作曲者自身のコメントが書かれており、演奏において「其々のブロック間には短い時間をおくこと」とある。また「Posane IのパートをTrumpetの第3パートに置き換えることができる」。曲想はGemessen（厳かに）とあり、音楽フェスティバルの際、アルプス山間の石造りの町に荘厳なファンファーレがよく響いた。演奏の際のI, II, III各ブロック間の“間”について、筆



者は直接ウーライから同意を得ている<sup>8</sup>。実際的には、8小節目のフェルマータの後、インテンポで2拍ほどの間隔である。楽譜は万年筆で書かれており、修正箇所が見当たらないことから、頭の中でまとめたものを直接五線紙に書いたものと思われる。本ファンファーレは、特にシュラートミンクの音楽祭のために書かれた。

(図4)<sup>9</sup>



### 3-3. シュラートミンク舞曲<sup>10</sup>

バイオリンとピアノの為の「シュラートミンク舞曲」(Schladminger Tänze für Violine und Klavier)は1966年に完成。冒頭には「Seiner Geburtsstadt herzlichst zugeeignet」と記載され、「生まれた町シュラートミンクに心からの献呈」とある。図5はバイオリンとピアノの為の楽譜であるが、3つのバージョンがある。

(図5)

2

Seiner Geburtsstadt herzlichst zugeeignet  
**Schladminger Tänze**

ERNST LUDWIG URAY  
1966

Gemessenes Tempo, festlich

Violine

Klavier

I

1. 2. ① L'istesso Tempo

© Copyright 1967 by Ludwig Dohlinger (Bernhard Herzmannsky) KG, Wien, München  
D.12. 565

- a. シンフォニック・オーケストラのための
- b. 金管五重奏のための
- c. バイオリンとピアノのための (図5)

これらの a. b. 2 曲は LP レコード「Schladminger Tänze」に収められている。a の演奏時間は17分30秒、b の演奏時間は20分20秒である。ここでバイオリンとピアノ・バージョンについて其々の曲想や調、拍子について進行順に表に示す。

| 第 I |                                                                   |
|-----|-------------------------------------------------------------------|
| 曲想等 | Gemessenes Tempo, festlich<br>L'istesso Tempo ruhiges Walzertempo |
| 調   | D-dur B-dur Ges-dur                                               |
| 拍子  | 3/4 4/4 3/4 4/4                                                   |
| 曲想等 | quasi stretto Tempo I stretto                                     |
| 調   | B-dur D-dur                                                       |
| 拍子  | 3/4 2/4 3/4 2/4 4/4 3/4                                           |

| 第 II |                                |
|------|--------------------------------|
| 曲想等  | Ruhig fließend Kräftig         |
| 調    | G-dur C-dur As-dur C-dur G-dur |
| 拍子   | 3/4                            |

| 第 III |                                        |
|-------|----------------------------------------|
| 曲想等   | Sehr ruhig, fast ein wenig sentimental |
| 調     | C-dur                                  |
| 拍子    | 3/4                                    |

|     |                                     |
|-----|-------------------------------------|
| 曲想等 | Allegro moderato Tempo I come sopra |
| 調   | As-dur C-dur                        |
| 拍子  | 2/2 3/4                             |

| 第 IV |                           |
|------|---------------------------|
| 曲想等  | Allegretto Frisches Tempo |
| 調    | F-dur B-dur D-dur         |
| 拍子   | 3/4                       |

|     |                               |
|-----|-------------------------------|
| 曲想等 | Allegretto, Tempo I mit Wärme |
| 調   | F-dur B-dur F-dur             |
| 拍子  |                               |

| 第 V |                             |
|-----|-----------------------------|
| 曲想等 | Allegretto grazioso animato |
| 調   | A-dur D-dur                 |
| 拍子  | 2/4                         |

|     |                                       |
|-----|---------------------------------------|
| 曲想等 | Allegro brillante Moderato; cantabile |
| 調   | B-dur Es-dur                          |
| 拍子  |                                       |

|     |                                       |
|-----|---------------------------------------|
| 曲想等 | Allegro brillante Allegretto grazioso |
| 調   | H-dur D-dur                           |
| 拍子  | 2/4                                   |

|     |       |
|-----|-------|
| 曲想等 | vivo  |
| 調   | A-dur |
| 拍子  | 3/4   |



以上のように、作品はⅠ～Ⅴの5つの部分から成る組曲である。ここでは和音構成以外の要素についてまとめてみた。楽曲の全体像・フォルムや曲想、構成の概要がこれで把握できる。

曲の其々は、全て転調している。また主調、転調とも全てdur（長調）である。但し時に短調的な響き（借用和音やその調におけるS和音、あるいはⅥ度の和音の使用によって）が聞かれる。長調の中の刹那的な短調の香りを含み中、長調の特性を生かした旋律や音響は、彼の特徴をよく表現している。

第ⅠではD-durに始まりD-durで終結する。第ⅡではG-durに始まりG-durに、第ⅢではC-durに始まりC-durに、第ⅣではF-durに始まりF-durに、第ⅤではA-durに始まりA-durに終結している。

つまり中間部で複数回転調を繰り返すが、全体を通して、その其々が必ず主調に回帰している。このことは、基調とする調の特性を重んじ、それを最大限生かすことを作曲者が指向した結果であるだろう。それはⅠ～Ⅴの其々を明確に性格付け、対比し、結果として全体のバランスを保つ役割を果たしている。

楽曲の全体は民謡的で抒情的な旋律で終始するが、民謡の編曲ではなく作曲＝創作であるとウーライは記している。また、「民謡（Volksmusik）が持つ様々な芸術性と青少年が強い関係を築くために」との作曲者の記述がある。このようにウーライの作品には、青少年（Jugend）の音楽教育を意識したものが多く存在する。

### 3-4. ウーライの作品群について

ここでは作品の幾つかについて楽譜を提示する。

(図6)

(図7)

図6は「金管五重奏曲の為の音楽」(MUSIK FÜR BLÄSERQUINTETT) Fl.Ob.Kl.Hrn.Fag, Verlag Doblinger 1966, 図7は「クリスマス」(Weihnachten) ヨゼフ・フォン・アイゼンドルフ（のテキスト）による声楽曲 Verlag Doblinger 1970である。

(図8)

図8は「アルペン地方の演奏曲Ⅱ 9つの小品」(Alpenländische Spielmusik II 9 Kleine Stücke) Kl.2.Hrn.Pos. 作曲 /1979, Doblinger 1980, 図9は「メロディとハーモニーの学習 ピアノの為の」(Eine melodisch-harmonische Studie FÜR KLAVIER) Verlag Doblinger 1951。

これらの楽譜から、再掲になるが特に青少年の音楽教育に強い使命感を持って創作活動を継続していたことを読み取ることができる。それは、明快な楽曲のフォルム、やさしい和音構成や和音進行、美しい旋律等を要素として、其々の作品の総体からうかがい知ることができる。

(図9)



言い換えれば、それらの諸要素が青少年にとって理解し易く、そしてもっとも重要なことは、青少年にとって「演奏可能な」難易度を、それらの作品が保持しているということである。アンサンブルを例にとれば、例えば大学や音楽院の学生、市民オーケストラや市民吹奏楽団のメンバーなどが演奏可能な作品群であるといえる。プロ演奏家は勿論のことであるが、ウーライはいつも青少年の音楽教育を念頭において仕事をしていたことが、これらのことから理解できるのである。

#### 4. 音楽教育活動について

ウーライは古くから音楽教育に深い関心を示していたことは既述したことである。略歴にもあるとおり、音楽院や音楽大学等で教鞭を執っていたが、より開かれた教育を目指した活動を実践している。それは青少年のための様々な演奏会の企画と実施である。既述した「シュラートミンク市夏の国際音楽祭」は特に注目される。ここでは彼の青少年のための演奏会について、その起源を追ってみたい。

##### 4-1. ウーライの社会貢献とSchladminger Musiksommer

ワルター・シュティッペルガー（Walter Stipperger）によれば、1949年、グラーツにおいて最初の青少年演奏会（青少年の為の音楽観賞会）が開かれた。AUME（AustroMechana）理事、オーストリア・リヒャルト・ワグナー協会名誉会長の要職を永年務め、Schladminger Musiksommer（シュラートミンク市夏の国際音楽祭）の芸術監督となる。

また同じく当音楽祭について彼は、シュラートミンクの

音楽的な歴史を示したのち、「シュラートミンク市は1977年にシュラートミンク市夏の国際音楽祭を取り入れ成功に導いた。このことは、当音楽祭の未来を示すサインになった」と述べている。

(図10)<sup>11</sup>



図10はシュラートミンク市庁舎である。音楽祭の企画センターとなったところであり、市をコアとしてシュタイアーマルク州も協力した。音楽祭実施の為、ウーライが足繁く通い陣頭指揮をした中心地でもある。町全体が中世的な景観を保持し、ヨーロッパで最も美しい町としても知られている。ウーライはこのような環境の中で心身共に育まれていったのである。

##### 4-2. 音楽祭におけるアプローチ

ところでシュラートミンク市夏の国際音楽祭はどのような経緯で開催されるに至ったかについては、月刊誌「バンドジャーナル」<sup>12</sup>の筆者のレポートから、筆者が直接ウーライにインタビュー<sup>13</sup>した資料の一部をここに引用してその答えとしたい。

ウーライ「1938年の春ですが、わが国にドイツ軍が侵入して、ヒットラーがオーストリアを自国ドイツへ併合してしまつたのです。第二次大戦終結の年、つまり1945年に、終戦によってオーストリアはナチス・ドイツの抑圧から逃れ、カール・レンナー博士の率いる、時の臨時政府は、オーストリアの独立を宣言しました。

しかしながら、1955年にいたる十年間は、四大国—つまりフランス、イギリス、ソ連、アメリカの連合軍の占領による軍の駐留が続き、真の意味の独立は、1955年五月に、ウィーンのベルベデーレ宮殿でのオーストリアと連合国四か国における国家条約調印後、占領軍がオーストリアから撤退し、国民議会がオーストリアの永世中立を議決した同年十月以降のことです。

シュラートミンクもこの30年戦争の中にありましたが、その後1975年に、私は市政50周年を祝うイベントのオルガナイズを同市から依頼されました。もっともシュラートミンク自体は800年の歴史を持つ古い街ですが。私はシュラートミンクの市長や市民の期待に添うべく、様々なコンサ

ートをオルガナイズしましたが、他の音楽祭には見られない特徴あるものを、と考へて、編成の大きいオーケストラやブラスムジークの音楽祭を計画しました。このことは市当局にも受け入れられて準備を進め、やうと1977年に国際的な音楽祭を開催することができたのです。アメリカ・コロラド州のプエブロ・シンフォニー・オーケストラと指揮ゲアハルト・トラック教授をメインに迎え、八月十五日から六日間に計三回のコンサートを開きました。そこではシュタイアーマルク州の作曲家の作品が七曲演奏され、作曲家で指揮者であるグラーツのフランツ・シュライナー他二名が招待されました。

私の“バリエーション”—モーツァルトの主題によるピアノとオーケストラの作品—も、トラック教授の夫人、ミカエラのピアノで演奏されました。また、トラック教授の“神聖なラブソディ”，メンデルスゾーン，ムソルグスキー，スメタナ，ブラームス，ブルックナーなどの作品が演奏され，プログラム内容も国際的な色彩のものでした。この音楽祭は大成功に終わったのです。

しかし，1978年はいろいろな障害があつて，音楽祭の開催をあきらめねばなりませんでした。1979年はイエルゲ・デムスのピアノが，この音楽祭のメインになりました。そしてそれ以降については，あなたもよく知っている通りです。」

筆者「そうですね。1980年には私が教授に推挙した，東京の関東第一高校ウィンド・オーケストラを迎えて“ブラスムジーク・フェスティバル”が開催されました。’81年は，これは昨年私がウィーンにいた時にいただいた教授の手紙に書いてありましたが，ベルギーのケンペンラント青少年吹奏楽団，ピアノのルドルフ・ブッフビンダー，デムスのコンサート。そして今年が，二年前と同様に日本の高松吹奏楽団をメインとした音楽祭です。」

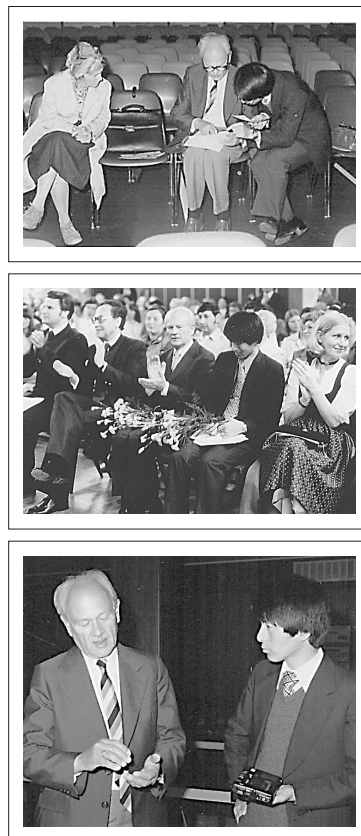
## 5. エルンスト・ルードヴィヒ・ウーライの遺したもの

ウーライの遺したものについて，有形なものと無形なものに分類して提示してみたい。ただし作曲活動における作品群については既述のためここでは割愛する。

### 5-1. 無形なもの

ウーライに関わった全ての人々—関わった当時の指導者や若い音楽家たち—が，彼の意味や精神を受け継いで今なお活動していること（ヨーロッパだけでなくアジア，アメリカ等多くの国々の音楽家や音楽愛好家たちを含めて）。世界の多くの人々がその活動を受け継いでいくということ，それが，ウーライが遺した最も大切で，彼自身が最も望んだことであつたと確信する。そうしてそれが，次

(図11)<sup>14</sup>



に述べる「形あるもの」として，彼の精神とともに次代に受け継がれていくことになるのである。

### 5-2. 有形なもの

その多くが「形あるもの」として現存するが，その最たるものは次の2つである。それらは全て，彼の生まれ故郷であるシュラートミンクが拠点となっている。

- ・Ernst-Ludwig-Uray-Musikschule Schlading  
従来の市立音楽学校は，現在，ウーライの名を冠した音楽学校となっている。
- ・MID Europe Festival für Blasorchester in Schlading  
ウーライの時代はメイン・バンドに大学や高校のオーケストラや吹奏楽等を迎え，セミナーとコンサートを開催。一時期はBlasmusik Fest. と呼ばれた。期間中にはウィーン・フィルハーモニーの団員によるソロや室内楽，デムスやブッフヴィンダーによるピアノ演奏会等で音楽祭は構成されていた。現在では従来の内容を踏襲しながらも，その規模は拡大し，より盛んである。特に吹奏楽においてはヨーロッパでも中心的なフェスティバルとして発展している。

現在，有形・無形なそれらは相互に結びつき，多くの人々が音楽を通じた青少年の育成に情熱を注いで活動している。そうしてウーライ没後20数年を経て現在，その輪が確実に生地シュラートミンクから世界に広がっていること



を、我々は認めることができるのである。

最後に、悲報の折の筆者の原稿<sup>15</sup>を引用して本論の結びとしたい。

(前略) ウーライ教授が4月14日午前10時、ついに帰らぬ人となってしまいました。享年82歳。生前から心臓病に悩まされていますが、そんな中で精力的な活動を継続して

(図12)<sup>16</sup>



おられました。(中略) いつも自己に厳しく、そして私たちに優しくった URAY 先生のご冥福をこの誌面を借りて心からお祈りいたします。

(図13)<sup>17</sup>



## 文献

Ernst Ludwig Uray SCHLADMINGER TÄNYE レコード解説文

POLY GRAM WIEN Nr.0120 531 (1982.7 シュラートミンク市長ヘルマン・クレールから記念品として筆者に贈られたLPレコード)

## 注

- 1 ウーライはこのことについて“ein Instrument”とのみ記している。おそらくはピアノのことであろう。
- 2 音楽理論(Theorieschuler)とあるが、実際的には作曲技法についても師事したと考えられる。但しウーライ自身は単に「音楽理論」としか記述していない。
- 3 [http://wikipedia.org/wiki/Ernst\\_Ludwig\\_Uray](http://wikipedia.org/wiki/Ernst_Ludwig_Uray) 2012.1.3
- 4 シュラートミンクの隣町アドモントの音楽博物館に、生前から図2の楽譜とともに展示されていたプロマイド。1980年、当博物館にウーライ夫妻たちと訪れた折、婦人が筆者に語ったところによると、それらは以前から展示されているが、ウーライ自身はそのことを未だ知らないということであった。
- 5 1小節目がアウトタクトのため実質は7小節であるが、ここではアウトタクト1拍の小節も1小節としてカウントしている。
- 6 T (Tonic chord) = 主和音, S (Subdominant chord) = 下属

和音, D (Dominant chord) = 属和音

- 7 トロンボーン
- 8 後年、筆者は日本での吹奏楽団の演奏会において、本ファンファーレを複数回指揮している。
- 9 「シュラートミンク市夏の国際音楽祭」のメインホールであるシュラートミンク市民ホール 撮影/1980年7月
- 10 VERLAG DOBLINGER 1967 Wien
- 11 写真/テス飯島
- 12 バンドジャーナル1982.11月号「シュラートミンクの音楽祭に参加して」P92-93 執筆/筆者 音楽之友社
- 13 インタビュー通訳 Evelin Lackner 1982.7
- 14 上・ウーライ夫妻と筆者 演奏会場(ダヒスタイン・タウエルン・ハレ) 中・オープニング・コンサート(シュタット・ザール) 下・ウーライと筆者 1980.7 写真/テス飯島
- 15 教育音楽中高版 1988.5月号 P106-107 音楽之友社
- 16 図12, 13はウーライ夫人から届いた写真。
- 17 図13はシュラートミンクにあるウーライの生家に掲げられているという。「生家 オーストリアの作曲家Ernst Ludwig URAY 1906-1988」とある。後日、筆者はドイツから彼の地を訪れ墓石を訪ねたが、残念なことに生家には立ち寄っていない。